

論文の和文要旨	
論文題目	モンゴル語の格と共起する動詞・名詞の意味的特徴
氏名	青木 隆浩

本稿はモンゴル語の動詞の格共起の傾向について、①格の持つ意味、②動詞の意味分類、③名詞の意味分類の観点から考察を行った。具体的な方法は下記の通りである。

まず、考察の対象とする格は「与位格」「道具格」「奪格」「共同格」の4つとした。次に、コーパスでこれらの格語尾を検索し、一定条件のもとに抽出した例文の動詞を出現数の多かった順に並べ、それらの動詞に対して意味分類を行った。いくつかの動詞については母語話者へのアンケート調査を実施することで、その動詞が果たして特定の格と共起する傾向にあるのか否か、他の格に置き換えが可能なのか否かを明らかにした。さらに、共起した名詞についても意味分類を行った結果、「それぞれの格と共起する動詞や名詞の傾向」を明らかにした。また格語尾には複数の意味が存在するが、その意味決定には動詞と名詞の双方向からあるはいずれか片方がより強く影響することにも言及した。

以下に各章の内容について述べる。

【第1章】

第1章ではモンゴル語の格に関する先行研究をまとめた。Kullmann and Tserenpil (2008 [2005])、清格尔泰 (1991)、岡田・向井 (2016 [2006])、《新蒙汉词典》编委会 (2002 [1999]) では、モンゴル語の格がどのような動詞や名詞と共起するのかについて言及されている。だが、実際にはこれらの先行研究で取り上げられている動詞以外にも、特定の格と共起しやすい動詞が存在する。さらに、それぞれの格が共起しやすい動詞や名詞にはどのようなものがあるのかという意味的傾向を明らかにした研究は不十分であると言える。本稿では第2章以降にてコーパス調査を行い、これらの問題を考察した。

【第2章】

第2章ではコーパス調査を行うに当たって例文を選定した基準と、必要な例文を効率よく抽出するために用いた Excel の数式について述べた。本稿で研究対象とするのは「格語尾と共起する動詞と名詞の傾向」であるため、コーパスで格語尾を検索文字列として例文を検索するが、その際にいくつかの問題が生じる。例えば、①格語尾は短いため、同じ文字列を含む関係ない単語も検出してしまう、②複合動詞や格語尾の後が著しく長い文などは、格が

どの動詞に関係しているのかの判断が難しいなどが挙げられる。そこで、「格語尾の直後の動詞は単独で終わるもの」のみを分析対象とし、Excel の各種関数を用いて該当する文を選び出した。本章ではそれらの Excel の数式が言語学研究における大量言語データ処理への応用の可能性があることを実証した。

【第3章】

第3章ではコーパス検索から抽出した例文についてそれぞれの格語尾と共起した動詞を出現数の多い順に一覧表化し、さらにそれぞれの格における動詞と名詞の意味的分布の特徴についても出現頻度順に並べて表で示した。これらのデータに基づいて個々の例文を分析するとともに、適宜ネイティブコンサルタントへの聞き取り調査を行い、より詳細なニュアンスや他の格への置き換え可否などを明らかにした。

【第4章】

第4章では第3章で得られた例文について、複数の母語話者を対象にアンケート調査を実施し、各方言間における動詞の格要求の違いを明らかにした。

以下、第3章および第4章を通してそれぞれの格について明らかになったことを述べる。

<与位格語尾>

与位格語尾は「移動」に関する動詞と「場所」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。先行研究では与位格支配動詞として取り上げられている *itgex* (信じる) については対象物を対格で表す例が 1 例のみ現れた。この文の許容度についてハルハ方言のみならず内モンゴルの各方言話者にも対象を広げてアンケート調査を行ったところ、ハルハ方言では「与位格」を用いるのが自然であるという答えが優勢なのに対し、内モンゴルの各方言では「対格」を用いるのが自然であるという答えが優勢であった。したがって、上記の例に代表される格の選択には方言差および動詞の他動性が関係しているということが明らかになった。

<道具格語尾>

道具格語尾は「発話」に関する動詞と「抽象物」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。中でも *xelex* (言う) と *duu* (声)、*caraj* (顔)、*bajdal* (様子) の組み合わせが多くみられ、いずれも言葉を発した時の様子を表すために道具格が副詞的に用いられていた。

道具格と共起した動詞の中でも特徴なものは「増減」に関する動詞である。*nemegdex* (増加する)、*xasagdax* (減少する) といった動詞は増減分を表すために一般的には道具格を用いるが、格を用いない形式でも表現することが可能であり、双方に意味の違いは生じないことがコンサルタントへの聞き取りで明らかになった。ただし、増減分を表す言葉のうち *daxin* (倍) については格を用いない形式のみ可能であることがわかった。

<奪格語尾>

奪格語尾は「移動」に関する動詞と「場所」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。奪格と共起した動詞で特徴的なものとしては、「動作」「直接影響」「授受」に関する動詞が挙げられる。「動作」「直接影響」に関する動詞の中でも *tatax* (引く)、*barix* (つかむ)、*ujax* (結ぶ) といった動詞は、対象物に奪格語尾を用いると「～の一部を～する」という「部分格的用法」を表す。対象物を対格で表すことも可能であるが、その場合は「全体を～する」の意味を表す。例えば「服をつかむ」ことを表現する場合、部分格的用法を用いると「人が着用している服の一部をつかむ」のに対し、対格を用いると「(誰かが着ているのではなく) 置いてある服をつかむ」、すなわち動作主の力が全体に及ぶ状態であることを表す(他動性が高い) ということが、アンケート調査で明らかになった。

また、「授受」に関する動詞 *olox* (得る) は「入手先」を奪格で表すのが一般的である。日本語では「得る」の意味を持つ動詞は「～で手に入れる」「～で拾う」のように位格が現れるが、モンゴル語では奪格で入手先を表し、与位格への置き換えが原則不可能であることがコンサルタントへの調査で明らかになった。

<共同格語尾>

共同格語尾は「交流」に関する動詞と「人」に関する名詞の組み合わせが最も多かった。共同格語尾で特徴的なものとしては、「関係」に関する動詞が挙げられる。「関係」に関する動詞ではコピュラ動詞と共起した場合、共同格語尾は「～持ちの」の意味を表す *propriative suffix* (所有接辞) として機能していた。しかし、共同格語尾が「～と共に」の意味を表す *true comitative* (本物の共同格) であるのか、「～持ちの」の意味を表す *propriative suffix* (所有接辞) であるのかの区別は、形の上で判断することが難しい。そこで、本稿では両者を区別する判断基準として、「①共起する名詞が有生物であるか否か」「②動詞の相互性が高いか否か」「③動詞の他動性・意志性が高いか否か」に注目することが効果的であるとして提唱した。そして、①概ね名詞が無生物で、②動詞の相互性が低く、③他動性・意志性も低い場合に「形容詞接辞」ないし *propriative suffix* となる傾向にあり、特に「名詞が有生物か無生物か」が両者の区別に最も影響する可能性を指摘した。

【第5章】

第5章では今後の課題として、「様々なジャンルや文体の収集と分析」「特に内モンゴルの方言における自然談話資料を用いた格の使用実態調査」の必要性を述べた。